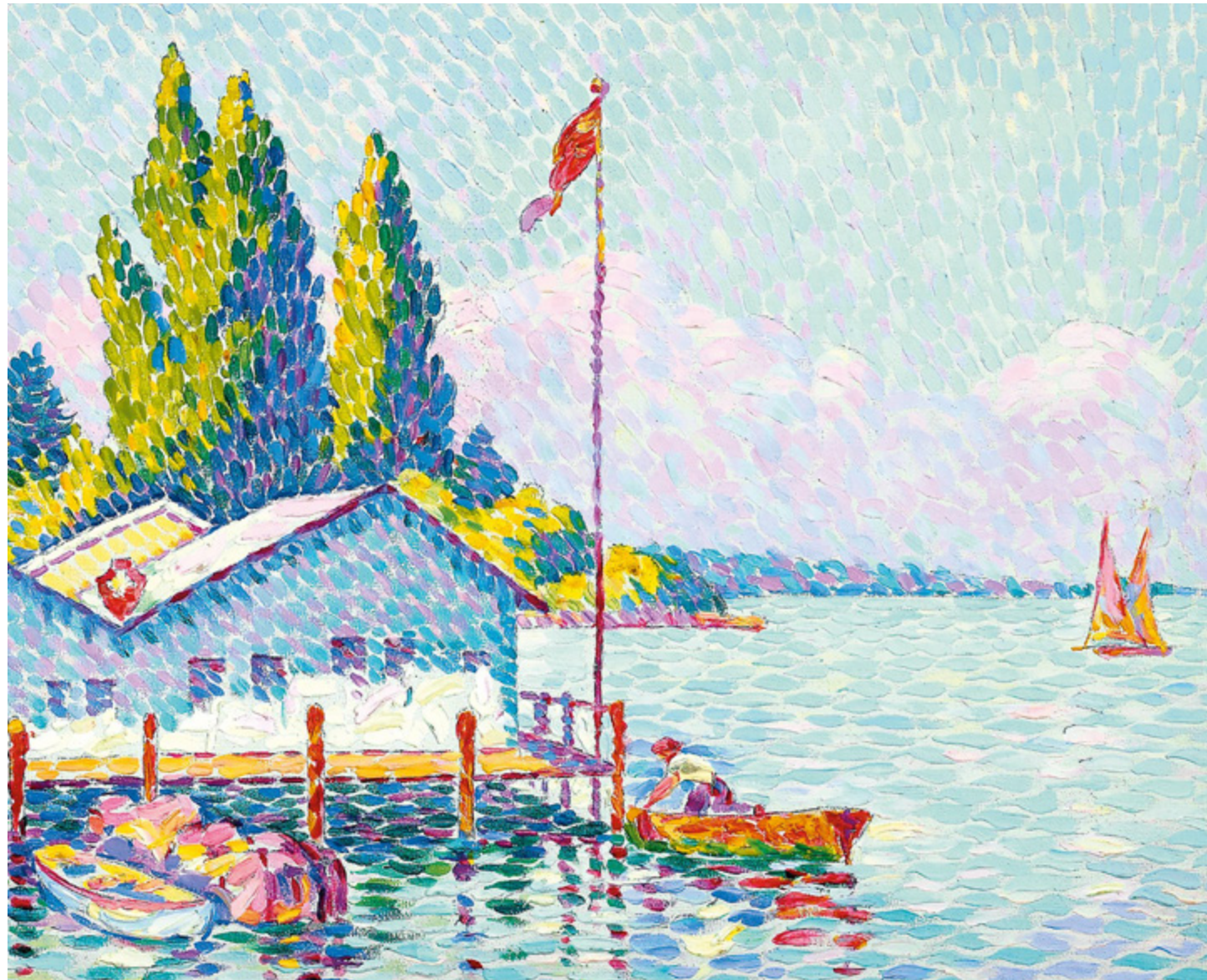


# レマン湖に 寄せる頌歌



レマン湖の湖畔で育った  
フィリップ・スターン氏は、美術品を  
収集するようになってからも、この地を  
テーマとする作品にとりわけ関心を  
寄せてきた。ここでは、氏が自身の  
ヨットでの冒険や、インスピレーションを  
受けた絵画を回想し、歴史家であり  
小説家でもあるジャック・プレスラーが、  
スターン氏の絵画コレクションについて  
解説する。





だからこそ、私は何年にもわたってレマン湖とその岸辺や港の個性を表現した絵画を収集してきた。その中には、純粋に芸術的な価値から選んだものもあるが、私はとりわけレマン湖における数々の遠征の記憶や感動を呼び覚ますような作品に惹かれてきた。今の若い人たちにとって、これらは過ぎ去った

「ボル・ドール」では7回の優勝を果たした。しかし私の喜びは対戦相手を破ったことではなく、湖の個性のすべてを知り尽くし、波や湖岸、周囲の山々、そしてとりわけ頭上を駆ける雲を観察することであった。

何時間、時には何日にもおよぶ緊張に満ちたセーリングは、純粋な喜びであった。それは謙虚さや自然への尊敬の念を与えてくれた。私は実業家としての人生を通じ、いくつかの嵐を体験したが、そのたびに私を助けてくれたのは、こうして培われた平衡感覚であった。

当時、港は閑散としていた。時折年老いた漁師に出会うと、経験と思慮に欠けた船が風で流されてしまった、などという恐ろしい話を聞かされた。以来私は、湖は餌いならすことのできない生き物であり、安全のためには、常に湖を観察し、突然の気分の変化に備えなければならぬと確信するようになった。

その後の約40年間、湖への情熱から、私はレマン地方で開催されたすべてのレガッタに参加することになった。昼夜を問わず何百ものレガッタに出場し、その多くで勝利を得た。例えば

若い時から数人の友人とスナイプ・デインギー（小型のヨット）に分乗し、何日も湖や岸辺を探索していた。私たちは偉大な探検家になったつもりであった。目指したのはローヌ河が流れ込むレマン湖のはずれであったが、常に風に恵まれたわけではなく、目的地に到達できることは希であった。人けのない湖畔に上陸し、火で何かを焼いて調理したり、あるいは夜を明かしたりした。嵐が来そうになると、急いで岸辺にたくさんある小さな港のひとつに向かうことを覚えた。

レマン湖への生涯にわたる愛情に裏づけられた、ユニークな美術コレクション



【前見開きページ】  
1948年に制作された「エルマンズの湖」(ルネ・ギナン)に見られる湖の静けさは、ギナンがいつもテーマとしていた20世紀の都市生活の喧騒とは対照的に心を和ませるものであった。  
【次ページ】「棧橋」(エドゥアルド・フェール)。生まれ育ったニースの色彩と光の効果、そしてシニャックの点描画は、20世紀初頭に活躍したド・フェールの作品に

強い影響を与えた。  
【当ページ】19世紀後半の湖の風景は、水と山と空をソフトなブルーで描いたコンスタンス・シュザンヌ・アシナレの「湖の高みに向かって」(1898年、上)などの作品や、19世紀後半から1940年代にかけての長い活動歴を持つ、フレデリック・デュフォーの作品に描かれている。彼の「市場からの帰還」(下)は、日常的な光景を詩的な感性で表現した大作である。





【当見開きページ】  
レオン・ゴーは、19世紀後半の風景や素朴な情景を描いた巨匠である。「エルマンズの農家の婦人たち」(左下)では、夕焼けから夕暮れへと移り変わる光と影の扱いが絶妙である。対照的に1950年代初頭にデビューしたバンジャマン・ヴォーティエ

(ベン・ヴォーティエ)の「旗で飾られたモンパラン橋」(左上)は、昼間の陽光に照らされた旗の色の鮮やかさを謳歌している。ヴォーティエは静物画の画家として大きな成功を取めたが、このジュネーブ風景のように、光に包まれた見事な風景画も描いている。しかし

本コレクション中、他のどの画家よりも景観の精神的本質をとらえていたのはルイ・ボージェであろう。「コロニー沖の朝」(1943年、右)が示すように、彼は湖のさまざまな表情を描き、風に吹かれる水、雲の形成、微風を受ける船などの効果を表現する天分に恵まれていた。





この湖畔、あの岸壁、あの船…。  
これらの絵画は、今日では失われた  
過去の証である。

失われた過去の象徴として地元の画家たちが好んで描いたのが「レマン湖の艇」である。スターン・コレクションには、この船が何度も登場する。ほとんどの画家はその魅力に抗することができなかったのだ。コレクション中、特に注目すべきはオーギュスト・ヴェイヨンとアルベル・ゴスの見事な傑作、ナタナエル・ルメートルの確固たる才能、フランソワ・ボンソンの小品、フレデリック・デュフォーの大作、そしてウジェーヌ・マルタンの簡潔さと鋭い観察力である。

しかし何よりもコレクションが賞揚するのは、ルイ・ボーディ（1924年、彼の最初の展示会をスターン家が支援した）の作品である（58〜59ページ）。この特筆すべき画家は、レマン湖畔と著名な艇のきわめて真実に溢れる詩的なビジョンを私たちに残してくれた。コレクションに収められた彼の主要な作品は決して見飽きることがない。

スターン・コレクションを鑑賞した後では、もはや以前のようにレマン湖を見ることはできない。芸術は、流行に盲従せず真実であり続ける時、私たちに自然と人間を見る目を開かせてくれる。✦

た昔の楽しみを懐かしむだけのものかもしれない。それでも、レマン湖はかけがえない贈り物であり、大切にすべきものであることを認識してほしいと私は思う。

**専門家の視点から：失われた時代をとらえた芸術（ジャック・プレスラー）**  
スターン夫妻がレマン湖をテーマに収集したコレクションほど魅力的で真正なプライベート・コレクションは、他にあまりない。

いつの時代も、ヨーロッパ全土から旅行者や観光客がレマン湖を訪れ、その美しさを堪能したり、湖上でヨットを楽しんだりしてきた。しかし湖畔に住む幸運な人々は、印象的な水の広がり、時刻や季節による微妙な光の変化、そして岸辺で繰り広げられる光景を毎日眺めることができるという大きな特権を与えられている。

スターン夫妻により愛情を込めて選ばれた画家たちが私たちに残したの絵画は、かつては存在していたが、進歩の名の下に永久に追放された過去の証である。

PHOTOGRAPHS © ARTGRAPHIC CAVIN SA



[当ページ]  
20世紀中頃の「リヴァズ近郊のグレロール城」（アルベル・デュブラン）は、巧みな遠近法の

使用により、レマン湖の珍しい眺めを描く。視線が城に向かって下降し、その先の湖畔で過ごす晴れた風のある

[次ページ]  
エリス・ズピンテンによる20世紀後半の水彩画は、湖畔で過ごす晴れた風のある

日のリラックスした雰囲気を描き、「オーヴィヴの堤防上のバラソル」はその好例である。